

日本語の視点から見た  
『三国演義』における待遇表現

从日语视角看  
《三国演义》中的待遇表达

邢文柱 著

大连理工大学出版社

## 序

☒文柱君は中国、遼寧師範大学で日本語を学び、卒業後同大学講師を勤めること8年、『日本語慣用句の分析』（共著、1999年3月刊）を発表するまでに成長していた。2000年4月、福岡教育大学大学院教育学研究科国語教育専攻に入学、国語学担当の杉村教授に師事、待遇法を研究「日中待遇表現についての比較研究」（修士論文）をものした。2002年4月、久留米大学大学院比較文化研究科日本文化系後期博士課程に入学、日本語教育を専攻（指導教員 笠栄治教授）することとなった。2005年3月、同課程終了後は比較文化研究所研究員として研鑽を積んだ。

久留米大学進学後、中国における待遇表現の具体を知るべく、江戸時代中国文学研究の緒をなした（通俗物—白話小説の翻訳）『三国志演義』（『三国志通俗演義』・『三国演義』とも）の多彩な登場人物に着目し、その待遇表現を研究することとした。

『三国演義』（☒君使用底本の称に従う）は白話文ながら明の嘉靖元年（1522年）刊、清の康熙18年（1679年）改訂流布の刊行本である。全文が繁体字で書かれている。繁体字の理解を急速に成し遂げた☒君の語学的才能に驚かされる。

かくて、240節120回24巻仕立ての『三国演義』を読みきり、登場人物相互に見える待遇表現を精査したのである。悉皆調査の成果は回毎に具体的使用例を「資料編」（総348頁）に今後の研究に資すべく提示している。待遇表現に使用された語彙は1字（語）構成のものから4字熟語のもの、6字構成の語句に至るまで様々であるが、「異なり語数」（「賊」は458回用いられるが1語と看做して）は548字語句に及んで（4字熟語の「女流浅見」や6字から成る「狼心狗行之徒」も「異なり語」としては1語と数える）その全使用例（「延べ語数」）は計り知れない。

☒君は研究の底本として北京・作家出版社1953年10月刊の『三国演義』を選んだ。清の毛綸・毛宗岡が改訂し康熙18年（1679年）に刊行した本によったという該本は第一回から第60回（約291000字）までを上冊、第61回から第120回（約292000字）までを下冊に収めている。ただ、後人添削部分については削除した由の添書が「出版説明」にはあるという。

『三国志』は晋の陳寿（233年—297年）の撰。正史『三国志』は後漢末（169年）から魏・呉・蜀の三国分立を経て晋が天下を統一するまでの100年間の、三国三巴の興亡史、即ち魏の曹操、呉の孫権、蜀の劉備に焦点をあて、通俗の物語風に興味深く展開させた、俗語の歴史小説が『三国演義』（『三国志通俗演義』・『三国志演義』とも）である。

『三国志』の物語は口唱・講談によって語り伝えられる間に世俗巷間に流布成長したと考えられている。晩唐9世紀

には「説三分」という三国の物語専門の講釈師が発生していたことが知られ、現存する最古のテキストは元末の至治年間（1321年－1323年）の刊本「全相三国志平話」とされる。毎ページ絵入りという「全相」（上段に絵、下段に物語）仕立て。物語は粗雑で幼稚な文体で俗語混じり。即ち、講釈師が口伝えた物語を読み物用に文字化したと考えられている。元代流布の戯曲等の材も、内容は概ね「平話」を拠り所にしたと言われる。

また、『三国志』講演の説話を集めた「三分事略」が宋人の説話の底本とされる。桃園の契りに始まり諸葛孔明の病没に至る8万字の長編である。かくて、『三国演義』の原型が成ったと考えられよう。

『三国演義』の作者羅貫中（名は本、貫中は字、湖海散人を号す。山西省太原の人、元から明の14世紀に生きたという。伝は未詳）は「平話」を改作し、合理化したという。

正史の『三国志』等から歴史事実を採り入れ、「平話」の10倍以上の長編作品とし、その面目を一新したので『三国演義』は改作ではなく羅貫中の創作とされる所以である。朱子学を大成した朱熹の大義名分論・正統論によって蜀漢正統論を採用、曹魏正統論を退けたといい、劉備、関羽、張飛の桃園の契り（第一回）から三顧の礼（第37回）の諸葛孔明登場から「秋風五丈原」（第103回）。敵役の曹操、その他英雄豪傑、知恵者と勇将の活躍が展開する。その中、「関羽崇拜」（「忠」と「義」を一身に集めた聖人化）を明確にした。

『三国演義』が240節24巻本として成立刊行されたのは明の嘉靖元年（1522年）で、巻首に弘治7年（1494年）の序を載せるので「弘治本」と称される。この2節を合わせて一回とし、全120回の章回体が出来上がったのは17世紀初頭、明の万暦年間（1573年－1619年）とされる。日本に渡来したのは万暦本（19年本、33年本、38年本が現存）で天竜寺の僧達に読まれ『通俗三国志』（元禄2－5年刊、1689年）となった。

その後、清の康熙18年（1679年）、毛綸・毛宗岡父子によって改訂された刊行本がある。この改訂本は『三国演義』の定本と見做され、他本の出版を押さえてしまった。

『三国演義』は「三分事略」や「平話」＝等の先行作品をもとに「羅貫中本三国演義」を14世紀中に創作したと考えられよう。それは約一世紀を経て「弘治本」（1494年）となったと考えれば、「羅貫中本」＝「弘治本」＝「万暦本」の構図が成り立つかは本文批評の結果を見るまでは首肯できないのも当然であろう。『三国演義』が成長する文学、増補改訂が常時に行われる文学であったとすれば、その詞章の変動がなかったとは言い切れない。関羽崇拜の漸次な高まり等が本文詞章に影響しないとは考えられない。

「弘治本」から2世紀近くを経て毛綸・毛宗岡が改訂した「康熙本」が現行『三国演義』とすれば、「羅貫中本」「弘治本」「万暦本」「康熙本」が同一詞章か、改訂個所がどこでどんな改訂が行われたかの緻密な書誌学的考証、本文批評がなされなくてはならない。

語法研究・待遇法研究の対象となる『三国演義』の詞章は、「羅貫中本」の14世紀末と見るか、最終改訂の「康熙本」の17世紀と見るかで語法・待遇法に相違を生じることが否めない。☒君の研究対象が「康熙本」を底本としたのは、「羅貫中本」から「康熙本」へ、中途に「弘治本」或いは「万曆本」等を介在させて考えるべきかを論証する資料、具体的考証の論もなかったからである。「康熙本」即ち、毛父子の本文校訂を『三国演義』の完成（現存）と看、通俗物（白話小説）の17世紀伝承本に見る語法・待遇法研究の試掘と想定せざるを得ないのは詞章本文の伝承を考証することが出来ないからである。『三国演義』の待遇法研究が「康熙本」に由ったとしても、14世紀末成立の「羅貫中本」を17世紀改訂の「康熙本」による隔靴搔痒の観はあっても現実には斯界唯一の研究であることには変わりない。

☒君の「『三国演義』に見る待遇表現」は「研究編」と「資料編」とからなる。

待遇表現を

本論で示す待遇表現というのは『三国演義』における登場人物が相互に対し、また、相互間が話題の人物に対して、上下、尊卑、優劣、親疎、憎悪、敵対などの諸関係により、それぞれ異なる言語上の扱いを用いることを言う。また、物語の語り手（ここでは作者の羅貫中）が読み手である読者に対して以上のような諸関係に基づいて、作品の登場人物に異なる言語上の扱いを用いることも待遇表現という。

と設定し、『三国演義』の待遇表現語彙を悉皆調査した。

抽出された待遇表現語彙は「附編」の「資料集：『三国演義』の待遇表現精査表」（総348頁）にまとめた。各回（2節分）の待遇表現語彙を抽出してその使用例（法）を明示し、使用例に意味と誰が誰に対する待遇表現かをその都度考証した労作である。この資料集によって『三国演義』の待遇表現の全用例を見ることができ、且つ、待遇表現の語彙（句・文）を大別して「敬語表現」と侮蔑表現とすること。敬語表現はさらに「尊敬表現」と「謙讓表現」とからなること。「侮蔑表現」も「卑罵表現」と「輕卑表現」とに細分できることが確認できた。いずれも全用例を抽出し、緻密な考証を経てあるので貴重な、今後の待遇表現法研究の資料となるのである。ここに提示解説される待遇表現語彙はその道の研究に不可欠な基礎資料でもある。いずれも修士論文で待遇法を研究した成果を援用しての論である。

「資料編」の考証成果をもとに本論「待遇表現の研究」と「待遇表現語彙表」が帰納法によって提示される。

「尊敬表現とその語彙」（句・文を含む）（第一章）は「尊敬語」を設け、「尊敬を表す名詞とその一類」（第一節）「尊敬を表す動詞とその一類」（第二節）「尊敬を表す語句について」（第三節）に細分してして論じられる。

「尊敬表現」は登場人物相互、相互間が話題の人物との上下、尊卑、親疎などの関係により、相手または話題の人物及びその人の物、行為を敬って表現することとし、その語・句・文を名詞184語彙と動詞44語彙による228語であることを突き止めた。尊敬表現語彙は名詞による表現が目立ち、動詞

(群) や文型による表現 (群) は少ない。

- ① 尊敬表現語彙は動詞や文型による表現が、名詞による表現より少ないことが確認される。名詞使用が動詞使用の4.6倍であることが看取される。
- ② 尊敬表現は相手の動作、行為をどう表現するかと言うよりは、相手或いは相手側の者・事をどう表現するかに重点が置かれているのではないかと考えられる。

の総合的判断は首肯できる。

「謙讓表現とその語彙」(第二章)も「謙讓を表す名詞とその一類」(第一節)「謙讓を表す動詞とその一類」(第二節)「謙讓を表す語句について」(第三節)に細分して論じられる。

謙讓表現は、登場人物が相互に対し、上下、尊卑、優劣、親疎などの関係に基づいて、自分または内側及びそれに属する物・行為を謙って表現することとし、異なり語彙数で名詞31語彙、動詞87語彙、「尊敬表現」になかった4字構成語(熟語)14語の計132語彙であることを精査した。「謙讓表現」は名詞の2.8倍の動詞が使用される。(名詞に4字熟語を加えても、動詞は名詞の2倍である)。謙讓表現は異なり語数で見ると名詞による表現より、動詞による表現が多い(述語的表現が敬語表現より増えると考えられる)。名詞にも動詞にも「謙辞+実詞」の語型をとる。「愚見・拝見」の類が目立つ。4字構成の語「愚昧不識」「山野村人」の自己謙讓の謙讓表現もある。

自己の動作をどう表現するかというよりは、自分或いは内

側の者、または事をどう称するかに重点が置かれているのではないかと考えられる。

の総合的判断は的を得ている。

『三国演義』の待遇表現語（異なり語）548語彙のうち、名詞による尊敬表現が約33%を占めることも悉皆調査から言えることで、それが多いのか少ないのかは判断する資料が他にない。悉皆調査に基づく待遇表現語の数値解明が鶴首される。尊敬表現語彙228と謙讓語彙132（4字構成・熟語を含む）の比率も『三国演義』特有の現象なのか、今後の他作品との対照的調査研究によるしかない。

「侮蔑表現」は第三章「卑罵表現とその語句（句・文を含む）」と第四章「軽卑表現とその語句（句・文を含む）」とからなる。対人評価の具体を知ると同時に表現者、被表現者も含めて人間の本性を見る思いで、☒君の所論（考証・解説）に引きこまれてしまうものがある。

かくて「卑罵表現」（第三章）は登場人物が相互に、あるいは相互間が話題の人物に対し、絶対的な敵対関係により、相互に最低限に貶め、徹底的に侮辱する表現を言うと定義し、その語彙を異なり語数で名詞85語彙とする。即ち、卑罵表現は罵り手の総てを罵倒する語句に籠めるが、①動物（犬、豚の類に準らえる）、②身体的特徴（大耳兒）、③家柄や職業（屠沽小輩）、④「兒」を添える（織蓆小兒）、⑤姓名・幼名を呼び捨てる（曹阿瞞）等が主である。最も多い「賊」（使用頻度458）は断突であるが、「匹夫」（使用頻度27）と大差を生じる。大義名分論のもとでは「賊」の名

冠が如何に大きな価値をもつか判明しよう。1語構成から「狼心狗行之輩」等6字構成までであるが、その32語彙は4字で構成される。

第四章「軽卑表現とその語句」に言う「軽卑表現」は登場人物が相互に、或いは登場人物相互間が話題の人物に対し、卑罵表現程ではないが、相手を物の数に入れぬほどに扱ひ、軽く視たり、軽蔑したり、茶化したり、皮肉ったりする表現と定義し、異なり語数で103語彙（4字構成熟語46、名詞57）を検出している。

第四章「軽卑表現とその語句」は①相手の能力・才能を過小評価する（無才）また特別の語を付けて過小化する（小兒・小子）、②草や芥、虫けらに準えて低く表現する（草芥）、（蟻）、③「～輩、～徒」を用いた4字構成語（四字熟語？無能之輩、好色之徒）で表現する。軽卑表現の4字構成語は待遇表現語の約10%を占める。特徴のある表現法と言うべきであろう。

「十勝十敗の説」は読者に溜飲の思いをさせる軽卑表現であろう。「袁紹は繁礼多儀だが曹操は体任自然、従って此道勝也」と、以下、義・治・度・謀・徳・仁・明・文・武の十勝を言うのである。また、彌衡が曹操の文官武將を評するにも軽卑表現（4字構成）が大きな効果をあげている。4字表現の元祖と言えば、「蒙求」であろうが4字句596項に有名人の言行を織り込む手法（諺表現にも多量の4字構成語が報告されている。）が4字構成語（「蒙求」の語句数の15%相当）として発見できるのも悉皆調査の成果である。

待遇表現語彙（異なり語）は、敬語表現語彙（異なり語）が65%、侮蔑表現語彙（異なり語）が35%の割合で存在することが判明した。敬語表現語彙は更に尊敬表現語彙の名詞が33%を占め、謙讓表現語彙の動詞が約16%を占めることの発見も大きな成果と評価できる。

本論文は「康熙本」によるとは言え、緻密に本文58万字超の『三国演義』を悉皆調査し待遇表現の具体を抽出、論証した。中国語文の待遇法研究の嚆矢として、日本語待遇法研究の手法によって『三国演義』の悉皆調査と研究成果を成し遂げた成果は高く評価できよう。☒君の今後ますますの活躍に期待するものである。

2007年7月 高良山下の学窓にて  
久留米大学元教授笠柴治氏の遺思を汲んで  
久留米大学教授 崎村弘文 誌す

## 目次

はじめに	1
第一章 『三国演義』における尊敬表現	10
第一節 尊敬を表す名詞とその一類	10
第二節 尊敬を表す動詞とその一類	132
第三節 尊敬を表す語句について	152
第二章 『三国演義』における謙讓表現	159
第一節 謙讓を表す名詞とその一類	159
第二節 謙讓を表す動詞とその一類	204
第三節 謙讓を表す語句について	231
第三章 『三国演義』における卑罵表現	241
第四章 『三国演義』における軽卑表現	291
第五章 『三国演義』における待遇表現語彙表	333
終わりに	399
参考文献	410

## はじめに

### 1. 『三国演義』の変貌

『三国演義』は本稿のテキスト、北京・作家出版社、1953年10月の刊行本の書名によった。『日本古典文学大辞典』(岩波書店)では『三国志演義』を見出し語とし、『三国演義』、『三国志通俗演義』は別称とする。

『三国演義』は中国の後漢末年と魏、蜀、呉三国の歴史に取材し、後漢霊帝中平元年(西暦紀元184年)の黄巾軍蜂起から晋武帝太康元年(280年)呉の国が滅びるまで、およそ一世紀の歴史を物語りふうに描いたものである。晋朝の史学家、陳寿はこのおよそ100年間の歴史を史書『三国志』に編纂し、南朝の宋人裴松之は群書を博覧し、『三国志』に注をつけ加え、新たな史料を大量に補充したのである。史書『三国志』に始まり、三国の物語が歴代にわたり、人々に広く知られるようになった。杜宝著『大業拾遺漢録』によると、隋の煬帝の時にすでに「曹瞞コウ水スエ蛟カウ」、「劉備檀溪躍馬」などの芝居が現われ、それが河川の船上を舞台にして群衆向けに公演されていたといわれている(河川豊かな中国の南方であろうと思う)。唐の詩人李商隱の『驕兒詩』に「或謔張飛胡、或笑鄧艾吃」の表現があり、この中からも、三国の人物はすでに笑い話の好資料になっていたことを覗うこと

ができる。宋、元の時代に入り、民間の芸人によって、三国の人物が講壇や舞台に持ち込まれるようになったのである。宋、孟元老『東京夢華録』によると、北宋では、「説三分」(即ち三国物語)は「説話」における独立した一科目になり、そして、多くのもっぱら三分を語る著名な芸人が誕生したのであった。

現在、読者が目にするのできるもっとも早い説話本は、元初から元三十一年(1294年)の間に刊刻された『三分事略』であり、これはおそらく宋人の説話の底本であろうと考えられる。『三分事略』は上、中、下の三巻からなり、正文は桃園の契りからはじまり、諸葛亮の病没までを描き、約八万字もの長篇である。叙述は簡潔にして、三国の物語の始末梗概を大略的に成し遂げたものである。

元の時代には雑劇という独特な芝居が出現し、三国の物語も度々雑劇に持ちこまれ、芝居の最も豊富な史料になっていた。現存の三国関係の芝居の外題が四十あまり、芝居の台本が二十種類以上もあると言われている。

元末明初の『三国演義』はまさに上記の史書、平話、芝居をもとにして書かれたもので、作者は羅貫中である。

羅貫中の生没年、経歴等は不明とされるが、元末明初の14世紀後半に生生活躍した人であり、山西省太原の出身である。名は本、号は湖海散人、字は貫中であることなどが諸書に見える。また、羅貫中は江戸時代庶民に歓迎された『水滸伝』を合作または改訂した作家としても著名である。

『三国演義』、『水滸伝』など作者の作品の内容からすれば、羅貫中は「忠、義」を尊重し、「王道、仁政」を極力主張していることがわかれると思う。彼はまた農民蜂起の歴史

の働きを根本的に否定する思想も有していたことが『三国演義』における黄巾農民蜂起軍を「黄巾賊」、黄巾軍首領張角、張梁、張宝三兄弟を「賊首」、「賊将」と称する待遇表現からも一目瞭然である。

現在読者が目にするのできる『三国演義』の最も早い版本は、明弘治甲寅(1494年)に蔣大器が序文を著し、嘉靖壬午(1522年)に刊刻された『三国志通俗演義』である。全巻は二十四巻からなり、二百四十節に分け、「晋平陽侯陳寿史傳、后学羅本貫中編次」と題してある。その後、『三国演義』の版本はますます多種を呈し、現在、見られる明末の版本だけでも二十種類にも達するとされている。

清の康熙18(1679)年、毛綸、毛宗岡父子が羅貫中の編著本『三国演義』を新たに改訂したのである。この改訂において、毛父子は朱熹の『通鑑綱目』における蜀漢正統の観点を採用し、蜀漢正統論をさらに定着させ、曹魏正統論を間違いだと明確にしたものである。毛改定本のもう一つの特徴は「関羽崇拜」であること。関羽を「忠、義」を一身に集めた聖人のように描き出す表現は枚挙に遑がないほどであり、「関公」、「美髯公」、「雲長」(関羽の字)など関羽に対する敬語表現は随所に見える。

毛綸、毛宗岡父子のこの改訂本はその後『三国演義』の定本と目され、他本の出版を押さえてしまったと言われる。日本に輸入されたものは万暦本(19年本、33年本、38年本)があると言われるが、元禄2(1689)年『通俗三国志』に訳出された原本は毛宗岡本であろう。

『三国演義』は総計240節。2節を1回とし、計120回の章回体構成である。24巻本は各巻が10節5回に分かれ、240節の

構成である。他に12巻本、20巻本等があるが、いずれも120回構成である。本稿の底本は巻立てをしない、全120回240節の構成である。

底本『北京・作家出版社本』は上下2冊、各冊60回を収載する(第1回から第60回を上冊に、第61回から第120回までを下冊に収める構成)。この本文は「我們出版的這個本子也就以毛本為依據」(われわれが出版したこの本は毛本を元にした)とあり、後人添削部分については削除した等の添書がある(本書の展開にさしたる影響がないと考えて)。その他、地図、文字上の校訂を加えた成果であると「出版説明」に記される。

『三国演義』は紀元三世紀前後の黄巾蜂起とそれが弾圧された過程を反映し、魏、蜀、呉三国における集団内部の闘争を具体的に描き、ある程度当時の歴史の真相を映したものである。具体的にいえば、農民蜂起の弾圧については、当時の後漢末期の地方官僚列強も自己の利益を保全するために官軍に協力を厭わなかった。しかし、一旦、黄巾軍を弾圧してしまうと、官僚と地方列強の間にまた新たな混戦が始まるのであった。漢靈帝崩御後、幼帝劉弁が即位し、大將軍何進が朝廷の権力を握り、十常侍(宦官10人)が一旦権力を失い、後、謀って何進を殺してしまう。何進の股肱袁紹が兵を興し、宦官らを滅ぼしたのであったが、今度は董卓が袁紹を追い払い、幼帝劉弁を廃して、新たに陳留王劉協を新君に立てるのである。すなわち、漢献帝である。董卓は好きなままに政治を行い、朝野の激しい反発を受ける。そのなかで、司徒王允は美人局を以って董卓を殺すのだが、その王允も董卓の旧臣李暹、郭汜によって殺されてしまう。袁紹をはじ

めとする十七路諸侯が董卓討伐を名目にそれぞれの領域を根拠地に、お互いに混戦を繰り返す。黄巾弾圧から業を起した曹操、劉備、孫堅は幾多の戦争を経て、一步一步勢力を広げていく。曹操は「挟天子以令諸侯」(天子を挟んで諸侯に令す)という強い立場にあることから、十一年もの長期戦を繰り返り広げた末、黄河流域をほとんど統一し、中原大地に君臨する唯一の大軍閥まで至った。ところが、赤壁大戦後、曹操絶対優位の局面が崩れ、曹操、劉備、孫権三国分立の形が決まるのであった。その後、三国の間に七十二年もの混戦を繰り返り広げ、最後に晋によって統一されるのであった。

本論では羅貫中改定本『三国演義』における多彩な登場人物の相互の関係に注目し、それらの間に行われる待遇表現について精査した。作者から登場人物に対する待遇表現、登場人物相互に見える待遇表現を考究したものである。もちろん、物語構成の展開によって生じる待遇法の変貌を考慮しての基盤調査とその研究を意図したからである。

## 2. 待遇表現の定義

尚、本論で示す待遇表現というのは『三国演義』における登場人物が相互に対し、また、相互間が話題の人物に対して、上下、尊卑、優劣、親疎、憎悪、敵対などの諸関係により、それぞれ異なる言語上の扱いを用いることを言う。また、物語の語り手(ここでは作者の羅貫中)が、読み手である読者に対して以上のような諸関係に基づいて、作品の登場人物に異なる言語上の扱いを用いることも待遇表現と言う。

本論においては、『三国演義』における待遇表現の語彙、句、文の精査に基づいて、待遇表現を大きく以下の二種